

Rejoice

Special Report

[特集] 医療関連施設の清掃業務 (COVID-19 対応)



人や物の動きをエリア内で分ける ゾーニングを設定し、高水準の清掃業務を遂行

当社は、首都圏近郊における病院清掃を中心とした医療関連サービス業者です。

この度の新型コロナウイルス感染症（SARS CoV2以下COVID-19）に対する、様々な対応が要求される中で、いかにしてサービスの維持および清掃技術の標準化を実現してきたか、その貴重な経験を共有することで、医療関連施設の方々や同業者の方々の技術向上に役立てられればよいと考え、COVID-19対応の29施設の現場への調査を中心にレポートしたいと思います。

COVID-19の状況

2019年12月に中国武漢から発生したCOVID-19は、人類が初めて経験するウイルス感染症です。またたくまに世界中で感染拡大し、判明しているだけでも世界で感染者数4910万人、死亡者数124万人、日本国内でそれぞれ10.5万人、1806人（2020年11月6日現在）となっており、今現在も感染者が後を絶たない21世紀最大のウイルス感染症です。

我が国では、早期の水際対策とともに、三つの密（密閉、密集、密接）の回避や、社会的距離の確保、手指衛生やマスク着用および換気などに加え、環境清拭が強く推奨されました。しかしながら、経済へのダメージ緩和のために人の動きの制限を緩和すると、にわかには感染者数は増加し、徐々に我々の社会にウイルスが定着しつつあります。

医療関連施設の清掃の考え方

病院を初めとする医療関連施設においては、元々、一般的な生活エリアとは異なる水準の清掃が求められています。それは、病気や怪我や手術で免疫力が低下した患者が入通院するため、感染症のリスクが高いからです。感染症の病原体（ウイルスや細菌）は、人の身体や環境下で活性を保ち、身体や療養環境に触れた医

療従事者の手などを介して別の患者に伝播します（接触感染）。病原微生物の姿は我々の肉眼では見えませんので、汚染の可能性がある環境や手指を清潔に保つことや、個人用防護具（PPE）を着用することが基本となります（標準予防策）。

特に感染症に罹患していることがわかっている患者の周囲環境では、清掃はとて重要です。

こうした医療関連施設における清掃にあたり、標準的・効率的な作業手順が求められるため、使用する資材やその使い方、順番に至るまで細かく取り決め（標準作業書：SOP）た、清掃業務契約に基づいて作業をします。それにより、作業者によるばらつきや、安全の確保を実現しています。

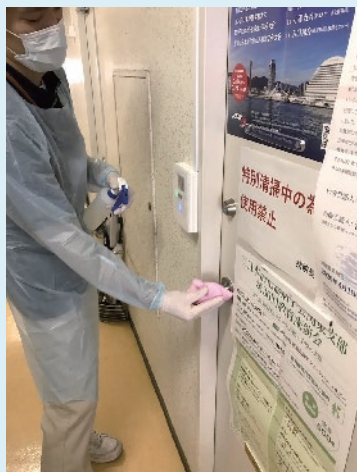


Covid-19の特別清掃時のPPE

教育の重要性

私たちは、こうした手順を現場で定着させ実行するために、従業員教育に重点をおいています。従業員は年齢性別だけでなく経験もばらばらですので、わかりやすい教育をいかに実現するかがポイントとなります。

そこで、動画マニュアルの導入、印刷教材の導入と携行、実技指導（OJT）と実技試験を入社前研修として最低限行っています。この研修では、感染防止の知識教育も含め、病院清掃の特徴と注意点をしっかりと学ぶ場としています。



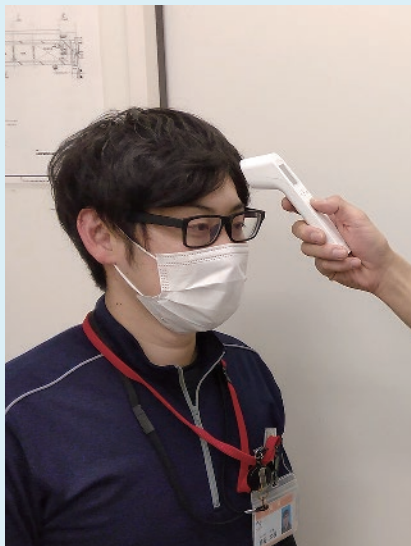
ドアノブの清拭



ロッカーの清拭



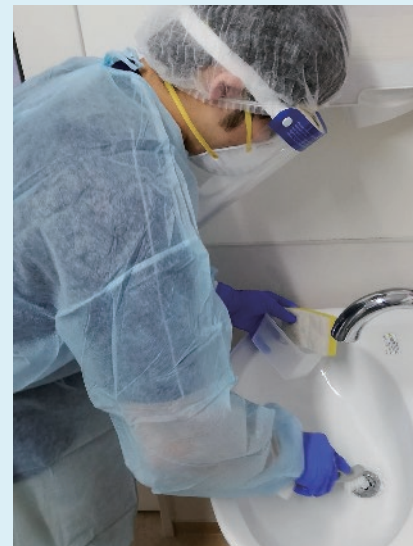
エレベーターのボタン清拭



入館時のスタッフ検温の様子



発熱外来待合室のソファ清拭



水回りの清掃

こうした研修を受けて、安全に作業ができるようになったスタッフのみを現場スタッフとして就業させることにより、委託する側も受託する側の従業員も、そして患者さんにもメリットが享受できるようになります。

COVID-19への対応 ゾーニング

さて、こうした取り組みを行う中、COVID-19への対応が求められることとなりました。

中でも重要だったのは、人や物の動きをエリア内で分けるゾーニングの設定です。

レッドゾーンでの清掃には、SOPを理解した精鋭スタッフを選抜して対応にあたるようにし、消毒効果が期待できる洗浄剤等を用いて清掃しました。(表2)

COVID-19患者在室時の日常清掃(週1回、3日に1回程度)は、当

レッドゾーン	標準予防策+接触・飛沫予防策(空気予防策)
イエローゾーン	レッドゾーン受入準備エリア・PPE着脱エリア
グリーンゾーン	COVID-19対応スタッフの待機・活動エリア

表1 ゾーニングの例

社の専任スタッフではなく看護師が清掃を行う施設が多く、その場合の余剰人員は、優先順位の高い、病棟・外来などの高頻度接触表面(High touch surfaces: HTS)の清拭に配置しました。

ICUでは、専任スタッフが退院時清掃を担いましたが、その際はPPEを完全防備して作業にあたり、終業後にはシャワー浴後に帰宅するという運用をとりました。

当社の専任スタッフは、退院時清掃を主として分担しました。その内容は施設との契約内容にもよりますが、表3のような仕様としました。

施設によっては、清掃作業に入る前に、作業スタッフの安全を確保する目的で、オゾン消毒や、蒸気化過酸化水素(Hydrogen peroxide vapor: HPV)などによる非接触型消毒を実施されていました。

スタッフの健康管理

医療関連施設の清掃業務にあたるスタッフの健康管理はとても大切です。スタッフが感染症の媒介者になってはならないからです。そのため、毎日の検温、健康状態の確認を行い記録して病院に

ゾーニング	作業内容	実施タイミング	PPE	消毒剤
レッド	日常清掃	毎日(ICU) 週1回・3日に1回(病室) (または入らない)	サージカルマスク(またはN95マスク)、手袋、フェイスシールド、エプロンまたはガウン、キャップ、シューカバー	0.05%次亜塩素酸ナトリウム、アルコール0.27%か0.5%加速化過酸化水素(0.033%は床面用) ペルオキシソ-硫酸水素カリウムPHMBなど *ある施設では清掃後にUV消毒
	退院清掃	・4時間換気後 ・看護師による一次清拭後 ・オゾン消毒後		
	発熱外来	1日1回(終了後)	マスク、手袋	
グリーン	患者・見舞客休憩室	1日7回	マスク、手袋	

表2

ゾーニング	作業内容	清掃部位(フル仕様スベック)
レッド	日常清掃	HTS、床面、水回り(洗面台、トイレ、ユニットバス)、医療廃棄物は看護師が梱包後に回収
	退院清掃	リネン回収・ベッドメイク、カーテン、ベッド、備品およびHTS、水回り、床面、医療廃棄物の回収
	発熱外来	床面、スイッチ・ドアノブなどのHTS、医療廃棄物は看護師が梱包後に回収
グリーン	患者・見舞客休憩室	テーブル、椅子、ATM

表3



スタッフ控え室では密を避ける工夫

報告をしなければなりません。また、スタッフの控え室では、密を避けるために、食事時のテーブル配置を工夫したり、多人数のミーティングを中止したりしました。また、サーキュレーターを用いるなどして強制換気に努めました。

清掃受託業者のBCP

清掃業務を受託する事業者にとって、社会不安のための風評被害や、それに伴う退職や休職、スタッフ確保の困難、それにも増し

て、医療施設の経営悪化など、今回のCOVID-19はインパクトが大きいできごとでした。こうした中でも、顧客のパートナーとなりうる高い水準の仕事や、従業員の安全まで考慮して行っている事業者には、決して逆風ではありません。事業継続計画(BCP:Business continuity plan)を構築する上で、医療の一翼を担う一員として、改めて基本的な清掃受託事業者のあり方を問われた時期でもあると考えます。

おわりに

今後、かつてのインフルエンザやその他の感染症と同様、国民ひとりひとりが気をつけながら、このCOVID-19と共存していくことになると思いますが、健康に留意しながら、先人たちの記した、標準予防策+感染経路別予防策を遵守した清掃を続けていきたいと思えます。

文献

黒岡 肇; 病院清掃業務に要求されたCOVID-19への対応策
病院設備, Vol.62 No.4 (352号) 2020年10月

編集後記 From Editor

今回のニュースレターに関連して、新型コロナ(COVID-19)に取り組む各現場の状況をRJC総合研究所黒岡肇さんの取材に同行させていただきながら、各病院担当者(責任者)の生の声を聞くことができました。そこには、一律での対策が取りにくい新型コロナへの対応について、(訪問させていただいた病院では)各担当者が、悩み、考え、奮闘している姿がありました。

例を挙げると、記憶にも新しいマスク不足が顕著だったころ、マスクがなくなるという危機感を感じてミシンを持ち込み従業員のマスクを手作りの職員がいました。また、ある病院責任者は、食事をするために入った飲食店で、入店を断られたという話をしてくれました。新型コロナウイルス患者の退院清掃を行った後、シャワーを浴びて帰るよう指示を受け、事態の深刻さを感じたという病院責任者の話もありました。中でも、苦渋であったと話してくれた中には、従業員から「もし(コロナウイルスに)感染したら責任をとれるのか」との声を受けた時だと話す責任者の姿もありました。そして、ある病院では、自粛要請が出た後一部職員(家族から出勤を反対された4人ほど)がその期間中休んだことで、その抜けた業務(共用部のトイレ掃除)を、責任者が一人黙々と清掃したことがあったことも話してくれました。

感染リスクの考え方は人それぞれです。そのうえで、従業員一人一人の思

いを尊重しながら、次へつなげよう(長期的視野に立って)行動した責任者の姿がそこにありました。感染防止対策を前提としつつも、私たちには、仲間である人と人との交流が必要になります。その中で、朝礼の在り方や昼食時や休憩時のふれあいの場をどう作っていくか、個の状況に合わせて病院ごとに考えなければならないことも多くありました。私たちは、病院に勤務しているということの意味を、そして、感染対策ではその一翼を担う取り組みが増々求められていることを考え併せなければならないということをやがうえにも痛感しました。ここに各人が奮闘した事実、そして、その誠実な振る舞いの積み重ねこそが、私たちRJC社員のプライドなのだと感じました。いまだに(2020年11月24日現在)、新型コロナウイルスの感染は拡大状況にあり、各病院の対応についても地域差や病院差が浮き彫りになっており、収束が見えない状態です。その中で、それぞれの病院に応じた対応をとるために、これからRJCの中でも地域同士の病院ネットワークの存在がますます大切になると感じました。

最後になりますが、この度の取材では大変な状況の中快く取材に応じていただきました各社員の皆様に改めて感謝申し上げます。

清掃事業部 永木泰造

全ては、お客様へ快適な環境を届けるために。

for the Client for the Society for the Ourselves

リジョイスカンパニーが
医療機関の様々な業務をサポートします。



ニュースレター

Rejoice

No.8

発行日: 2020年12月1日

発行: 株式会社リジョイスカンパニー ニュースレター編集部

〒105-0012 東京都港区芝大門 2-3-6 TEL.03-3433-0102 (代表)

URL: <https://www.rejoice-company.co.jp/>

Copyright © 2020 All Right Reserved.